地 域 の 概 要

木原町は，三原市の東端に位置し，南北約１㎞東西約３㎞と細長い地域である。南に波静かな瀬戸の海が拡がり，つい鼻先の500ｍ沖に大鯨・小鯨の二つの島が浮かんでいる。それを押し出すように，岩子島，因島，細島，佐木島と続き，さらに南に田島，横島，向島，弓削島，生口島，伯方島，大島と多島海をつくっている。

若干の出入りのある海岸ぞいに旧国道２号線と山陽本線が並行して走っている。北の一連の山は，糸崎に接する鉢ヶ峰429ｍから，内畠東方の鳴滝山402ｍへと続き，東端の福地から尾道栗原町に至ると高さ100ｍ程度となる。その細長い斜面に，みかん・わけぎ畑が広がり，その間に民家が点在している。住宅のほとんどは，下部の平地に密集しており，沿岸にわずかに中小企業が営まれているが，兼業農家がほとんどである。

昔，木原には，地域一面にたくさんの桃の木が植えられていた。桃の花が咲く季節には，瀬戸内海に映るその影は，それはそれは美しく，すばらしいものであったと言われている。そして，「桃の木原」として有名になり，いつしかそれが「木原」という地名で呼ばれるようになったとのことである。

温暖で住みよいこうした木原町には，古くから人が住んでいたと思われるが，石器・土器（縄文・弥生）などの遺物はまだ発見されていない。いつの時代か不明であるが，木原小学校の北後山道から西北の谷の小川に沿ったところに人の住んだと思われる場所がある。記録的に明らかなのは，1185年源平の戦以後からである。内畠だけでみると1185年には戸数７戸であったものが，1914年(大正3年)には83戸となり，1985年(昭和60年)には182戸となっている。

また，木原町は西より赤石・内畠・福地の三地域に分かれており，赤石の中央を流れる柳川，赤石と内畠の境になっているも助川，内畠の中央を流れる内畠川など土石流による洪水も多かったようである。なかでも1972年(昭和47年)，1976年(昭和51年)の二度にわたる洪水被害は記録に新しいところである。内畠の丘に建つ「水難の碑」も「誠之観音菩薩」の石像とともに，地域住民の安住への願いがこめられたものである。

こうした洪水が多かったためか，とんぎり岩をはじめ数多くの巨大な岩石がある。また，土地を掘り起こせば大小の石が出てくる。しかし，祖先の人々は，手の届く所はすべてを農耕地として切り開いていった。現在は，水田はほとんど見られないが，米作農業が運命づけられた江戸時代には，かなりの水田があったもようである。しかし，丘陵地は畑地として開墾され，麦・雑穀・甘藷などから，さとうきび・わた・たばこ・柿・桃などの換金作物が早くから栽培されていた。なかでも，明治の中ごろ「木原枇杷(びわ)」は名声を博したようである。

その後，1907年(明治40年)頃，向島から「わけぎ」を取り入れ，その後作として「なんきん」を導入していった。また，大正初期には，「除虫菊」が栽培され，木原の丘は一面白一色の景観であったと言われている。1926年(大正15年)以後，福地から「みかん」が新植され今日に至っている。

文化面で有名なのは，太鼓踊りがある。（1974年；昭和49年三原市無形文化財指定）これは，足利尊氏が京へ攻めあがる途中，戦勝祈願をして踊った勇壮なもので，運動会などで全校踊りとして引き継いでいる。この踊りは雨乞いの踊りとして，また雨が降った祝いの踊りとしても長く引き継がれている。

木原小学校は，こうした自然環境豊かな地域の西方に位置し，文化センター的な役割を果たしている。教育活動も熱心で，ＪＲ交通安全教室，あいさつ運動，あごは運動（あいさつ，ごみゼロ，はきものそろえ）と，さまざまな運動に取り組んでいる。